

令和 3 年度

事業所名 : はなみずき石鳥谷

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0372300244		
法人名	社会福祉法人 宝寿会		
事業所名	はなみずき石鳥谷		
所在地	〒028-3102 花巻市石鳥谷町上口一丁目3番地1		
自己評価作成日	令和3年10月5日	評価結果市町村受理日	令和3年12月7日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

法人の職員全員で考えた「人」人の出会いを大切に、その人らしい暮らしを守ります「心」寄り添い、信頼、感謝の心を持って接します「安」常に安心で安全な居心地の良い環境を整えます という基本理念のもとで「和と笑顔」を常に心に留めながら、毎日の支援を行っています。コロナ禍である中でも、少しでも笑顔で過ごして頂きたいと考え、体操や読み聞かせ、レクリエーションなど工夫しながら支援しています。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先 https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

閑静な住宅地の中、系列の養護老人ホームや特別養護老人ホーム、デイサービスセンター、短期入所生活介護事業所が敷地内にあり、地域交流や職員研修、災害時や緊急時の対応など、法人内での協力体制がしっかりしている事業所である。職員の発案で職員全員が理念の見直しに取り組み、自分たちの理念を作成し、それを基本として毎日の支援に取り組んでいる。職員は穏やかにゆっくりじっくり利用者に話しかけ、表情・言葉や行動などから思いをくみ取り、利用者が安心できる雰囲気を作っている。コロナ禍で家族との面会が制限されているが、月に一度健康状況や日常生活の様子を家族に情報提供し、家族の安心と信頼を得ている。ケアプランの目標達成に向けた取り組みは、利用者ごとに作られている「介護実行表」に毎日職員が支援内容を記載し検証もしている。職員それぞれが記載することにより、すべての利用者の情報が共有されているなど質の高い支援の実施に取り組んでいる。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和3年10月26日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

令和 3 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : はなみずき石鳥谷

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人の職員全員で理念について話し合う機会を持つことができ、新しく「人」「心」「安」をキーワードとした理念になりました。今までの「和と笑顔」はモットーとして法人全体で人の為、地域の為に役立ちたいと思いつながりながら実践しています。	地域密着型特養の開設を契機に、新しく「人」「心」「安」をキーワードとした法人理念に改めた。百名程の法人職員が少人数のグループに分かれ、理念の候補を検討して作られたものである。実践において「職員は、話し合ったからこそ、理念に向けて実践している」との思いがあるとしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	現在はコロナ禍であり、日常的な付き合いはできていないが、法人の代表者が地域の行事等に参加している。又、施設周辺の清掃を行う等地域の一員として活動している。	3か月毎に発行している法人広報誌を地域に回覧しているほか、事業所周辺の草取りなどの清掃を行っている。コロナ禍前は、近くにある保育園児との触れ合いや近所の方がボランティアとして訪問するなど、地域との交流が出来ていたが、今は感染予防のため見合わせている。	地域と関わって支援していきたいという管理者の思いを核に、事業所が持つ資源を活かして地域との交流を進めていかれることを期待する。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	発信する場がもてずにいる。法人が発行する広報誌に気軽に相談して欲しい事を掲載したりしている。	/	/
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	ヒヤリハットや事故報告を行い、ご意見やアドバイスを頂き全職員に報告し共有してサービス向上にいかしている。	コロナ禍のため書面会議として委員から意見をいただいている。例年であれば年6回開催し、行事や生活状況、事故、ヒヤリハットの状況などを報告し、委員から運営に対する意見等が出されていた。行政区長、民生委員、市の担当職員、地域包括支援センター、家族代表が委員となっている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議のメンバーになって頂き、待機者等の情報をお伝えし連携をとっている。	市担当者とは、窓口又は電話で情報交換を行いながら協力関係を築いている。要介護認定申請や生活保護ケースなどの情報も市担当者と共有している。事業所への入居に際しては、地域包括支援センターと空室や待機者等の情報を交換しながら進めている。	

令和 3 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : はなみずき石鳥谷

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	常に身体拘束をしていない環境であることを確認している。職員全員が身体拘束について理解を深めケアに努めている。しかし、スピーチロックについては取り組みが不十分と思われるので今後の課題ととらえている。	身体拘束をしないケアについて法人で勉強会を行い、その後、事業所だけの勉強会を行っている。入居者が引き起こす症状や原因をアセスメントし、不安や混乱等の要因を取り除くケアを実践している。玄関の施錠は、防犯上19時に施錠し翌朝6時30分頃に開けている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされないよう注意を払い、防止に努めている	法人として研修を行っているが、各事業所ごとの研修も必要だと思う。虐待につながらないように、職員の自覚とメンタルケアが必要と思う。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	施設研修で学ぶ機会はあるが、身近なこととしてとらえる事は、一部の職員だけと思う。現在保佐人を利用している方が1名いる。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約は主に管理者が行っている。その際は、共に契約書等を読み上げ質問等を聞いている。しかし、疑問点は後から出てくる事もあるのでいつでも聞いてほしい事を付け加えている。職員も契約の内容について把握しておく必要があると思うという意見があった。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	コロナ前であれば面会にいらしたときにご家族からの意見を聞くことが出来たが、現在はそれもできていない。家族交流会も開催できていないので、文章等での開催を考えている。利用者からの意見は日頃の会話からくみとっている。	家族から、面会時や運営推進会議の席などで意見要望を聴いている。利用者の要望等は、日常の会話や表情、行動から推し量っている。通院付添いを事業所でお願いしたいとの要望が家族からあり、対応した。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	所長・主任にその都度意見を伝えている。ミーティングや申し送りでも共有するようにしている。ケアについての意見が多いが、もっと全体で会議できる時間がほしい。年1回施設長との面談で直接伝える事ができている。今年度から勤務時間について変更してもらった。	職員は日常気付いたことを、その都度所長、主任に話している。話す機会は、年1回行われる施設長との面談でもある。具体化した居室へのエアコン設置、日勤勤務時間の変更(9:00~18:00⇒9:30~18:30)は、職員の提案による。	

令和 3 年度

事業所名 : はなみずき石鳥谷

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	シフトを組む時は出来る限り希望休日を聞いてくれている。又、人事考課を行い目標を持って働けるようにしている。資格取得の際は、金銭面も含め支援がある。資格手当、夜勤手当等がもらえるようになり、職員のやる気につながっていると思う。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	現在、施設外研修は中々できていないが、オンライン研修やDVDを使った研修を受けることができている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナの為、同業者との交流は出来ない状況となっている。たまたま町内ホームの職員と知り合いで情報のやり取りを年数回行っている。地域内での多職種との交流も無くなっている。		
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用開始前に面談し、本人・家族からお話を伺っている。しかし、要望等は時間がたってから出てくることも多いので日々の会話をすることで本人の安心につながるようにしている。入居後はフェイスシート・ケース記録等で情報を共有している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	申し込みに来られた時に施設内を見て頂いていたが、それもできなくなっている。事前に面談を行い、お話を伺うようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	面談での情報を共有する様にしている。生活が始まったら、気づいたことをミーティング等でその都度話し合いをしてその方に合ったサービス提供が出来る様にしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	一緒にできそうなこと(例:洗濯たたみ、新聞たたみ等)を行い、お礼を言っている。日々の会話を通じてよい関係性が出来る様にしている。		

令和 3 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : はなみずき石鳥谷

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	毎月、生活状況を家族にお渡しし、日々の生活の様子をお知らせし関係を築いている。おいでになった時には、お話を伺うようにしている。通院の報告等については、電話にてお知らせしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナの為、以前のように施設に遊びにきてもらうことは、出来なくなっている。最近の入居者は認知症が進行した方が多く本人からなじみの人や場所についてお話を伺うことが難しくなっているため、家族からの情報を頼りにしている。	コロナ禍前は、入居してからも友人が訪れていた。しかし、面会を制限している現在は、以前のように交流が出来なくなっている。今は、通院時にミニドライブ的に寄り道している程度である。管理者は地域との接点を持ちながら、関係を継続させるための支援が重要と考えており、コロナ禍が収束した場合には以前の姿に戻したいとしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	顔なじみの関係ができるよう、又支えになれるよう職員が間に入り関係づくりに努めている。徐々に隣の席の方を気にするようになっていく。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	相談等があった場合その後もフォローに努めている。隣施設(特養)に移られた方については、隣施設の職員に様子を聞きとったりしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	お話を傾聴することが大切と思う。本人の意思を確認できないときは、行動や言動に注意しながら思いや意向にそった支援が出来る様に努めている。またミーティングで情報を共有するようにしている。	一人一人の思いや意向の把握に努めている。リラックスする入浴時や夜勤で時間が空いた時などに隣に座って話を聴いている。把握が困難な入居者の場合には、仕草や行動から思いを汲み取り、職員間でその情報を共有している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	利用開始前に面談に行き、できるだけ情報を把握するようにしている。フェイスシートを1人1冊作り、生活歴等を職員間で共有できるようにしている。又、家族や利用サービス先の職員から情報を頂いて支援に結び付けている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日常生活の中で、日々体調や精神状態が違いうので、それぞれ把握し、職員間で共有している。		

令和 3 年度

事業所名 : はなみずき石鳥谷

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	モニタリングは担当職員も行い、その後担当者会議を開催し、ケアプランを作成している。コロナ前は、来訪された家族からも意見を貰っていたが、現在は職員間のみでの会議となっている。本人もまじえた多職種での会議を行い、いろいろな意見を頂きたいと思っている。	利用者の入居時に家族、管理者、担当介護職員、常勤看護師で担当者会議を行い、計画作成担当者がケアプランの原案を作成し、家族に説明のうえ支援している。介護に当たっては、「介護実行表」を作成し、計画の実施状況や入居者のその日の特徴を毎日記録している。職員がそれぞれ記録することにより全ての利用者の情報が共有されている。3ヵ月毎にモニタリングと計画の見直しを行っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケアの実践は「介護実行表」に記入し、職員間で共有している。気づきや工夫については「申し送り」に記録し、ミーティング等で話し合いをその都度行っている。職員は、業務に入る前に「申し送り」「業務日誌」に目を通している。また、「介護実行表」は、ケアプランに即して見直しを行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	同一法人の特別養護老人ホームが昨年度開設したので、家族が希望される時は申し込みを支援している。また、コロナ禍の為、以前は通院を家族にお願いしていたが、現在は職員が通院対応を行い、細かく症状を説明し医師の受診を支援できている。更には、ホームの浴槽に入れなくなった利用者は、養護老人ホームや特別養護老人ホームの特浴を使用させてもらい清潔を保持できるように支援している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナの前は、近所の方が歌のボランティアにいらしてくださっていたが、現在はコロナ禍の為、地域資源の活用はできていない。同一法人の事業所との交流もできていない状況である。しかしながら、隣の施設で火災の誤報があった時は、地域の方々が駆け付けて下さった事があったので、地域の方々とのお支えあいは出来ていると感じている。		

令和 3 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : はなみずき石鳥谷

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	基本的には今までのかかりつけ医を継続し受診している。コロナ禍の為、職員が通院に対応しているので、受診前や後で家族に報告を行っている。	基本的には、入居前からのかかりつけ医を継続受診している。かかりつけ医が替わる場合には、医師の紹介状で引継ぎが円滑に行われるようにしている。コロナ禍前の受診は、家族対応であったが、今は職員が付き添い、受診結果は家族に電話で報告している。歯科や皮膚科などの他科も受診している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週に1回2時間、養護老人ホームの看護師が来訪し健康相談を行っている。岩手県に緊急事態宣言が発令されている時は、リモートや電話で相談したり指示を受けたりして、常に24時間対応してくれている。また、緊急の場合は、その都度相談したり、来て診て貰ったりできる体制となっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入退院時には情報交換を行い、安心して治療に専念できるように支援している。また、退院できることが決まった時は、出来るだけ早く受け入れが出来るようにしている。退院後も、本人はもちろん家族も安心して生活が出来るように、医療職や家族と情報交換を行い、支援している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	契約時に重度化や終末期に向けた方針を説明している。しかし、実際に重度化した時に再度家族と話し合いを持つことが多い。コロナ前は、重度化した時に家族が居室に一緒に泊まって頂いた事もあった。	看取りは行っていないが、隣接する施設の看護師の支援を受けながら、事業所で対応可能な限り出来るだけの介護を行なっている。利用開始時に本人・家族に重度化や終末期に向けた方針を説明し同意を得ている。状態の変化に応じ、看護師、家族と相談して入院や他施設等への調整をするなどの支援をしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変や事故に備え、個人ファイルを作成したりマニュアルを作成し、全員が分かるところに置いたり、貼ったりしている。また、AEDの使い方の研修を受けている。しかし、実際の場面では不安を感じている職員もいる。		

令和 3 年度

事業所名 : はなみずき石鳥谷

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	マニュアルを作成し、年2回の法人との合同避難訓練に参加している。コロナ禍の為、水害時に隣接施設の2階、3階に避難する訓練はできていない。近隣住民の方々との訓練も長い間行っていたので、協力して下さる住民の方も多し。シフトの関係で訓練に参加できていない職員も居たので、今後改善していきたい。	ハザードマップで2~5mの浸水が予測される水害危険地域とされている場所に事業所がある。避難訓練では、隣接する養護老人ホームや町内の生涯学習会館までの避難に必要な時間を計測している。防災訓練は、2、3カ月に1回行っているほか、法人の総合訓練には、消防署職員のほかに消防団員や同一法人の特養職員も参加している。コロナ感染対策により近隣住民の参加協力は控えてもらっているが、いざというときの協力は得られる。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	日々、一人ひとりの人格や人権を尊重した対応を心掛けている。例としては、排泄や入浴時にはプライバシーに配慮して対応している。特に人格や人権に配慮が必要なのは、職員全員が日常の言葉掛けの時だと思っているので、今後お互いに気を付けていきたいと思っている。現状で気になっている所は、言葉掛けとトイレが男女同空間にある事である。	職員が利用者に向けて発している言葉の内容や語調等が、利用者の誇りを傷つけたり、プライバシーを損ねるものにならないように、配慮して対応している。利用者には「さん」付けで声掛けしている。少し大きな声で命令口調で話している時や「ちゃん」付けが聞こえたときにはその場で注意している。職員同士でも日常の言葉掛けに留意している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常生活の中で、出来るだけお話を聞く時間を作るようにしている。〇〇しませんかというような声掛けを行い、日常から自己決定できるように働きかけている。しかし、認知症の進行に伴って、自己決定が難しくなってきた方もいる。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者を待つ心がけで対応している。しかし、業務を優先する事も多く、一人ひとりのペースに合わせる事が出来ない事もある。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	清潔感のある身だしなみができるように支援している。居室に備え付けている洗面台で整髪等の身だしなみを整える方もいるが、ほとんどの方は職員がお手伝いしている。		

令和 3 年度

事業所名 : はなみずき石鳥谷

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	現在は、調理済みのクックチルを利用しているが、季節に合った料理が提供されている。以前は、調理の前のお手伝いや片付け等のお手伝いをお願いしていたが、コロナ禍でもあり、職員がすべて行っている。一人一人の状況に合わせた食事形態(ソフト食・粗刻み・一口大にカット・トロミをつける等)で提供している。	三食とも調理済みの「クックチル」を利用して、季節に合った料理を提供している。食事介助の方もおり、利用者の状況に合わせた食事形態で提供している。月に1回はホットケーキなどの手作りおやつを作って食べているほか、行事食では、季節の芋の子汁や茸汁などを楽しんでいる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	献立は委託業者の管理栄養士が立てており、栄養バランスは計算されている。水分摂取については、なかなか摂りたがらない方が多いので、好みの飲み物やスポーツ飲料等を提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	うがいや口腔ケアを毎食後支援しているが、十分にできない方には職員がお手伝いしている。認知症の進行に伴い、職員の言葉が理解できず口腔内を確認する事が難しい方もいる。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	「介護実行表」に排泄を記録し、職員全員で共有している。その方に合わせた声掛けを行い、トイレに誘導するようにしている。失禁前に誘導する事を、もっと全員で行うようにすれば、失禁が少なくなり、オムツ等の使用が少なくなると思う。	「介護実行表」の排泄記録により、利用者の排泄パターンを共有し、さりげなく声掛けしてトイレ誘導し、失禁を未然に防ぐ支援をしている。尿意や便意が無い方には事前に声掛けしている。利用者が思わず汚しても、恥ずかしいとか嫌な思いをしないよう小声で介助している。転倒が心配で、夜間には3名がポータブルトイレ4名が離床センサーを使用している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	「介護実行表」や「排便チェック表」を利用し、便秘になるようであれば水分摂取を促したり運動の声掛けを行っている。しかし、下剤に頼る事も多いので、水分量や食事等で工夫できれば良いと思う。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	安全に入浴して頂くために、事前にバイタルチェックや水分補給を行っている。その方の状態に合わせた入浴を楽しんで頂きたいと思うが、浴槽を跨げなくなってきている方もいるので、出来る限り楽しんで頂けるよう工夫していきたい。今月から特浴を借りられるようになるので、楽しんで頂ければ良いと思う。	月曜日から土曜日まで毎日、体調に合わせて週2回以上は入浴できるようにしている。本人に声掛けし、嫌がる方やバイタルが悪い方は入浴日を調整している。温泉効果のある24時間循環バブル湯であり、利用者は「石鳥谷温泉」と言って温泉気分を楽しんでいる。職員とゆっくり話ができる貴重な時間となっている。浴槽が深いためまたぐのが難しい方は、特養の特浴を利用している。	

令和 3 年度

事業所名 : はなみずき石鳥谷

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人ひとりの習慣に合わせて休んで頂いている。夜間は職員が一人なので、できる限りではあるが安全を確保しながらお話を聞いたりするようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	利用開始時や服薬に変更があった時はミーティング等で周知する様にしている。誤薬のない様に、その都度氏名・日付等を確認している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	出来る事、楽しみなど工夫しながら提供し気分転換になるようにしている。例えばタオルたたみ・計算ドリル・貼り絵・読み聞かせなど、個別に対応する事が増えている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。 又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍である為、希望する外出は難しくなっており、施設前の庭に出る等になっている。自力歩行出来る方は少なくなっており、利用者一人に職員が一人付き添わなければならないので、職員のシフトに合わせた外出支援となっている。家族と出かける事は、極力控えて頂いている。	コロナ禍の影響で、希望する外出は難しくなっているが、天気の良い時には、玄関前のベンチに座ったり、花壇の花を見たりして、外の空気を吸いリフレッシュしている。また、通院をミニドライブ的に捉え楽しむようにしている。コロナ禍が収まったら、事業所周辺を散歩したり、近くの保育園児と触れ合いたいと考えている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	本人が現金管理できる方がいないため、お金の管理は家族もしくは保佐人が行っている。小口の現金を施設で預かり、医療費やオムツ購入代にあてる支援を行っている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	現状では電話をしたり手紙を出したりする利用者は居ないが、年に1回家族あてに年賀状を書いて出す支援を行っている。家族からも年賀状が届いて喜んだと報告を受けている。		

令和 3 年度

事業所名 : はなみずき石鳥谷

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	感染予防の為、掃除や消毒に気を配っている。玄関ホールや食堂ホール、廊下の掲示物は季節により替えて楽しんで頂くようにしている。	共用の空間は不快や混乱を招くような刺激がないように配慮されている。トイレは掃除が行き届き清潔感があり、風呂場も広すぎずゆったり出来る広さである。ホールや廊下には、貼り絵や写真などが貼られ事業所での暮らしが窺われる。廊下にはソファが置かれて、数人で集える空間が作られてある。ホールでは、読み聞かせ、タオル体操、カラオケ、DVD鑑賞(石原裕次郎の映画)などを楽しんでいる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食堂ホールだけでなく玄関ホールで会話が楽しめるように工夫している。好きな時に好きな場所で過ごせる様に支援している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居の時は、なじみのある寝具や衣類を持参して頂いている。居室には物入れ・洗面台・時計・温湿度計が備え付けてある。また、夏に各居室にエアコンを設置したので涼しい空間で休養できるようになった。	利用者は、布団やテレビ、アルバムなど好みのものや使い慣れたものを持ち込み、家族などの写真を飾り落ち着いて過ごせるよう工夫している。待望のエアコンが設置され、夏涼しく冬暖かく過ごせる居室となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	施設内はバリアフリーであり、シルバーカーや歩行器、車椅子でも移動がスムーズにできるようにしてある。各居室の入り口に希望する方には名前をつけてわかりやすくしている。		